

## 1月30日 保幼小連携研修を実施しました



今年度、連携活動を担当している保育所・幼稚園5歳児担任、小学校1年(2年)担任教諭、及び小学校教育研究会生活科部教諭を対象に保幼小連携研修会を実施しました。

各連携協力園・校がグループに分かれて実践交流し、交流後、グループ発表を行いました。交流の視点は「①活動の中の子どもの学びや育ちを見取る」「②子どもの学びや育ちを支える保育者・教員の関わりについて考える」の2点でした。各園・校の連携活動をまとめた実践シートをもとに、保育者・教員が共に実践を振り返り、その効果や課題を共有することで、今後の連携活動に大いに役立つものとなりました。

鳴門教育大学大学院教授の木下光二先生のご講演では、遊びの中の育ちや学びを見とり、記録すること、可視化することについて学びました。

日時：平成30年1月30日(火)14:15~16:30

場所：林業センター 3階 会議室

内容：実践交流(グループワーク):各協力園・校の実施報告書をもとに意見交流する  
講義「遊びと学びの可視化について」

講師:鳴門教育大学大学院教授 木下光二先生

## 参加園/校

永福保育園	倉梯幼稚園	志楽小学校
岡田保育園	志楽幼稚園	新舞鶴小学校
さくら保育園	橘幼稚園	高野小学校
相愛保育園	中舞鶴幼稚園	中筋小学校
タンポポハウス	舞鶴聖母幼稚園	中舞鶴小学校
なかすじ保育園	三鶴幼稚園	福井小学校
東山保育園	舞鶴幼稚園	三笠小学校
やまもも保育園	朝来小学校	明倫小学校
ルンビニ保育園	余内小学校	由良川小学校
八雲保育園	池内小学校	与保呂小学校
うみべのもり保育所	大浦小学校	(50音順)
中保育所	岡田小学校	
朝来幼稚園	倉梯小学校	
池内幼稚園	倉梯第二小学校	

## 実践交流(グループワーク)

グループワークでは、6グループに別れ、各協力園・校の年間を通した連携活動の実践に基づいた報告や意見交流を行いました。昨年度からの連携活動の変化や、子ども達だけでなく保育者・教員の連携について、次年度に向けたヒントとなる内容など活発に意見交換されました。

## 【Aグループ】

新舞鶴小学校 余内小学校 岡田小学校  
やまもも保育園 舞鶴聖母幼稚園 東山保育園 岡田保育園

- ・1年生が5歳児に何かをしてあげるのではなく、5歳児と1年生と一緒に準備したり、作ったりすることで、子どもの力が発揮できる。
- ・1年生から学ぶだけでなく、5歳児から学ぶことも多くある。お互いに学び合えることが大切。
- ・1年生だけが教えるのでなくてもよい。
- ・保育者・教員が一方向的に活動を決めてしまうのではなく、幼・保・小それぞれに、子ども達が興味を持っていることをもとに交流した。
- ・全員で同じ活動をするのではなく、子ども達の興味や関心に基づき、1組と2組がそれぞれに違う活動を行った。
- ・1年を通して子どもの発達段階や特徴などを話し合い、保育者・教員が連携し事後の振り返りを行うことが大切。
- ・環境が違うと子どもの動きが違うため、園と学校がお互いの環境を知ることが大切である。
- ・1年を通して同じペアで取り組むことで、お互いの思いが伝えやすくなった。
- ・単発ではなく、1年を通して継続的に連携活動を行うことが大切。

## 【Bグループ】

福井小学校 由良川小学校 志楽小学校  
ルンビニ保育園 八雲保育園 志楽幼稚園 タンポポハウス

- ・園と学校との距離があるが、継続的な活動にするため、手紙のやりとりでつながる工夫をした。手紙でのやりとりをすることで、文字への関心が高まった。
- ・園と学校が、環境や指導の仕方など、お互いを知ることが大切。
- ・5歳児、1年生のどちらか一方がお客さんになるのではなく、一緒に活動することで遊びが広がる。
- ・5歳児、1年生がお互いに教え合う姿が見られた。遊びから学ぶ、生活と結び付けることが大切。
- ・子ども自身が連携活動の中での気付きを「気づきシート」に記入し、感想交流を行うことで、遊びから学ぶことができる。
- ・管理職である園・校長が、充実した連携活動のため話し合う機会を設け、連携活動の計画を立てた。
- ・イベントの消化型でなく、年間を通した継続的な活動が大切である。
- ・1年生の担任だけでなく、学校全体と園全体で研修等を実施していきたい。
- ・連携活動を通し、文字や数量への関心が高まり、生活科から各教科へとつながった。

## 【Cグループ】

大浦小学校 与保呂小学校 中舞鶴小学校  
さくら保育園 中舞鶴幼稚園 中保育所

- ・互恵性という点を大事に取り組みを考えた。
- ・園で事前の打ち合わせを行う中で、保育室の環境や園児の生活スタイルを知り、このような環境の中で連携活動を行うことが望ましいのではないかと、教員自身が気付くことができた。園の生活スタイルや環境を理解した上で、小学校での環境設定を行うことで、双方にとってスムーズに活動に取り組める要因になった。
- ・保育者・教員がこれをしよう、というのではなく、連携活動を進めていく

- ちに、子ども達から取り組みたい活動がアイデアとして出てきた。
- ・お互いの距離が近く、1年生が学校の帰りに気軽に声をかけたり、年間計画にない活動も多く取り組めた。幼稚園の招待で1年生が「おばけやしき」に参加。その経験から小学校では、次の新たな活動へと発想が広がり、子ども達から「こんなことがしたい」と声があがり、子ども達で話し合いや計画を立て、活動を進めていくことにつながった。
- ・学びを支えるためには、お互いがどのような環境で、どのような日常を送っているのかを知り合うことが大切ではないか。
- ・子どもの姿を見て目的意識を持つことが大事。
- ・保育者・教員は、子どもを信じてまかせ、見守ることが大事。

## グループワーク つづき

## 【Dグループ】

明倫小学校 高野小学校 倉梯第二小学校  
舞鶴幼稚園 三鶴幼稚園 永福保育園

- ・アサガオの種まきから、1年を通し継続して活動したことで、ペアの仲が深まった。
- ・小学校に任せるばかりでなく、園と小学校がそれぞれの得意分野を發揮して、活動が計画できるようになってきた。
- ・行ける時に行ける人数でアサガオの様子を見に行き、計画にはなくても状況を把握したり、随時交流したりした。
- ・1年生になると一番下の学年になるので受身になりがちだが、連携活動を行うことで、自分の経験を活かして、相手に自分の知っていることを伝えようとする場があり自己発揮できる。
- ・連携活動を通し、自分の思いを伝える場(交流する)が大切だと感じた。
- ・子ども自身が遊びやゲームを考えることで、試行錯誤する経験ができた。
- ・来年度に続くことを見通して反省を行うことや、次年度への継続を考えることが大切である。

## 【Eグループ】

朝来小学校 倉梯小学校  
相愛保育園 朝来幼稚園 倉梯幼稚園

- ・秋見つけを幼小それぞれで行い、5歳児・1年生と一緒に、どんな店にしようか考えた。
- ・グループごとに活動する中で、うまくいかない所を協力し試行錯誤していた。
- ・保育者・教員の声かけをどのようにするか、その都度話し合うことが大切ではないか。
- ・教師が喋りすぎないよう、子どもへのヒントや、声かけのタイミングの難しさがある。
- ・子ども同士で「こうしたらおもしろいのにな」ということに気付かせるには、教師の声のかけ方や見方に教師自身が気付くことが大切。
- ・保育者・教員が、日頃から気付いたことや思ったことなど、自分の思いを話す機会が大事。

## 【Fグループ】

三笠小学校 池内小学校 中筋小学校  
橋幼稚園 うみべのり保育所 池内幼稚園 なかすじ保育園

- ・保育者や教員が作る物や手順等を指示するのではなく、子ども達のアイデアに任せ、見守るスタイルをとった。
- ・5歳児・1年生がアイデアを出して活動し、見た目にとられることなく、内容を重視できた。
- ・様々なことに子ども達が自然に気付き、自分の意見ののびのびと言えた。

- ・5歳児・1年生が、考えを出しながら作りたい物を作る達成感や、満足感を感じられた。
- ・広い場所を分ける、グループごとに分ける、教室など、場所や空間作りの工夫が大切である。
- ・「10の姿」をふまえ活動を考えることが大切。
- ・保幼小で計画を立てることで、子ども達がスムーズに活動できた。
- ・5歳児が受身にならず、一緒に夢中になって活動することが大事。
- ・準備も活動の1つとして取り入れていくことが大切。

## 講義

連携活動には「楽しく」「仲良く」も必要だが、生活科は、「気付き」や「探究」にねらいを置くことが大切である。そこに生まれた会話、子どもの学びを言語化し残すことが大切である。

～木下先生講義より～

## 【幼児期の学びと小学校以降の学び】

- ◎幼児期は環境を通して学び、小学校は教科書を通して学ぶ。
- ◎子どもが手にとって夢中になり、自分なりに考えたり工夫したりして、おもちゃでない物をおもちゃにして遊ぶことが大切であり、幼児期と同じく低学年も物を使いながら学ぶことが大切。

## 【連携について】

- ◎連携のキーワード
- (P)プリンシパル：管理職が仲良くなる
- (P)パートナー：先生同士が仲良くなる
- (C)カリキュラム：計画
- (C)コミュニティ：地域で子どもを育てる
- ◎計画にないことも、子どもからの発信を受け保・幼・小が一緒にやっていくことも大切。
- ◎連携カリキュラムの視点
- 1. 今ある保・幼・小それぞれのカリキュラム
- 2. 活動後の話し合い
- 3. 互恵性のある活動
- ◎連携も接続も子どもの段差に目がいく。保育者・教師の教育観が変わらないと連携は進まない。
- ◎遊びやリズムが損なわれないようにすることが大切。

- ◎保育所・幼稚園は遊びに没頭できる。遊びに没頭できたら、学びにも没頭できる。学びに夢中になれる子どもを育てることが大切。
- ◎子どもの中に、自己肯定感や自己有能感が育まれたら、ますます段差がなくなっていく。
- ◎行ったことのない小学校に行く不安ではなく、知っている小学校なら安心であり、知っている人がいればもっと安心感が出る。
- ◎連携の目指すべき方向性、目的を持つことが大切。
- ◎スタートカリキュラムを作成するだけでなく、連携で学んだことを、小学校で教科の中に活かしていくことが大切である。
- ◎連携の本質は授業観が変わることである。
- ◎カリキュラム・マネジメントや、授業の何をどう変えるか認識していくことが大切。
- ◎実践がそのまま接続カリキュラムになっていくことが大切。これが「10の姿」である。
- ◎連携活動には「楽しく」「仲良く」も必要だが、生活科は、「気付き」や「探究」にねらいを置くことが大切である。そこに生まれた会話、子どもの学びを言語化し残すことが大切である。

## 【遊びと学びの可視化について】

- ◎一人一人の子どもの中に「10の姿」があるか。記録の中に「誰」「誰が」が入っていること

が大切である。

- ◎個人記録に個の学びが出てくるのが大切。
- ◎幼児教育のねらい・内容は、5領域である。その中で「10の姿」を捉え、育ちをしっかりと言語化することが大切。
- ◎まとめの『記録シート』は、お便りなど記録以外のものも載せているのがよい。
- ◎「こんなことをした」だけでなく、「こんな学びがあった」と言うことを記録していくことが大切。
- ◎園の中では個人の名前を入れるのも良い。個人個人の学びを記録に残す。
- ◎その場の様子が、具体的に書いている細やかさが必要であり、体の細やかな動きまで見ることが大切。
- ◎日常生活や遊びの中で個をしっかり見て、その子どもが何を学んでいるかを記録していくことが大切。

